

目的 健康で快適な衣服を追求し、演者らは久しく着衣調査を進めてきたが、それらの実態の変遷をたどり、実情を把握して、今後の被服教育と研究に役立たせるべく、本調査研究を実施した。約20年前（1968～1969年）に実施した女子大学生の着衣調査と、今回（1986～1987年）の着衣調査との比較に於て、第1、2報に引続き、冬季・春季の着衣実態における服種と組み合わせについて若干の成績を得たので報告する。

方法 調査は京阪神に居住する健康な女子大学生（18～19才）を対象とし、1968～1969年 121名、1986～1987年 125名について、毎月中旬に調査用紙を配布し、記入せしめた。調査内容の概要は、1) 年齢、身長、体重 2) 気温、湿度、暖房冷房の有無、寒暑感覚等 3) 衣服重量、衿開き、袖丈、衣服丈、材質、デザイン等 4) 靴下手袋等、類被服の重量、材質、デザイン 5) 靴類、傘類の重量、である。

結果 冬季において顕著な変化が認められた服種として、スリッパは、着用率および重量が、前回は98.6%、82.3g、今回は20.4%、60.1gと共に大幅な減少を示す。セーターは、着用率が前回は75.2%、今回は26.0%、と大幅な減少を示し、平均重量は217.7g、285.1gと増加を示す。コートは、着用率が前回は80.3%、今回は37.5%と大幅な減少を示すが、平均重量に変化は認められない。ショーツは、着用率に変化は認められないが、平均重量は前回は46.3g、今回は19.8gと大幅な減少を示す。従って、內衣については着用枚数および被覆面積の減少、重量の軽量化が判明した。他の服種および組み合わせ、春季における結果についても更に検討し報告する。